

## on end「続けて」の on, as for ~「～と言えば」の as など —OED で調べてみました, 日頃の疑問—

酒井 典久

英語の表現の中には、「どうしてそのような意味になるのだろう」と考え込ませるようなものが少なからず存在するのではないのでしょうか。そんな表現の背景を *Oxford English Dictionary* で調べてみました(ちなみに Oxford という地名は, ox「雄牛」を渡らせるのにちょうどいい ford「浅瀬」のある町, くらいの意味になろうかと思えます)。

Q: on end「続けて」は, なぜそのような意味になるのでしょうか。

It snowed for days on end.  
「雪が何日も降り続いた」

A: この表現は1400年代に成立したもので, その当時の on には to ~「～へ」とか toward ~「～の方に向かって」という意味がありました。OED はこの on end を 'to the end, right through' と説明しています。つまり, 「終わりに向かって, ぶっ通しで」という意味になろうかと思えます。

現代の on end は, 数詞を伴わない複数名詞(たとえば three days ではなく単に days)の後で用いるのが正用法とされています。しかし, OED には fifty miles on end「50マイル休みなく」のように, 数詞のついた複数名詞の後に on end が使われる例がしばしば見受けられます。

最後に, 「～の方に向かって」という意味を持つ前置詞の on をもう少しさかのぼってみましょう。すると an にたどり着きます。an は on の昔の綴りです。そして, この an はやがて n がとれ, a- という接頭辞となり, 現代にまで生き残っています。

たとえば, この「～の方へ」という意味の接頭辞 a- と side「わき」がくっついて出来た語が aside「わきへ」ですし, この a- と shore「岸」がくっついて出来た語が ashore「岸へ」になります。

↓ an side	↓ an shore
↓ a side	↓ a shore
aside	ashore

Q: keep ~ing「～し続ける」という表現がある一方, 同じ意味で keep on ~ing という表現もあります。keep on ~ing の on がとれて keep ~ing が出来たのでしょうか?

He kept (on) talking.「彼は話し続けた」

A: この類似する二つの表現がいつ頃文献に載ったかを OED で調べてみました。

keep ~ing <1794年>

keep on ~ing <1856年>

このことから, keep ~ing が成立したあとで, さらに行為が継続されていることを強調するために on が挿入されたと考えてよいのではないのでしょうか。

↓ He kept talking.

He kept on talking.

それから, この二つの表現の使い分けについてですが, 『ウィズダム英和辞典』(三省堂)に「on は, 行為・出来事が通常ならやめたり終わったりしてしまうような状況で依然として継続することを強調する際に用いられる」とありますので, 次のような場面に使うとよいのではないのでしょうか。

She kept on running in spite of the rain.

「彼女は雨にもかかわらず走りつづけた」

Q: as for ~「～と言えば, ~に関するかぎり」の as はどういう用法の as なのでしょうか。

As for me, I have no objection.

「私に関する限り, 異議はありません」

A: *OED*は、このas for ~やas to ~「~について」のasは、「as far asという意味で、asの後の前置詞が言及する範囲を限定し、明確にしている」と説明しています(as...restricts or specially defines the reference of the preposition.)。さてここで、このasが次にくる前置詞の言及範囲を限定している、とはどういうことなのでしょう。次のfor meとasがついたfor meを比較してみましょう。

for me 「私にとって、私のために、私の代わりに」

as for me 「私にとって」

つまり、for meだけでは前置詞forの意味・用法はいくつか可能性が考えられますが、asがつくとforの意味・用法は「~にとって」だけに限定されることがわかります。加えて*OED*は、as for ~やas to ~はso[as] far as it concerns ~「~に関する限り」に相当すると説明しています。また、as to ~の方がas for ~より先に文献に載ったこともわかります。

as to ~ <1300年代>

as for ~ <1400年代>

これは私見ですが、この2つを比べると、to ~の方は直接的でズバリ指し示すニュアンスがあるのに対し、for ~の方は間接的で柔らかい響きがあるのではないのでしょうか。

「持ってきてあなたに直接渡す」ニュアンス  
bring water to you



bring water for you  
「とりあえずあなたのために持ってくるが、あなたが誰に飲ませても構わない」ニュアンス

さらに*OED*にはas regards ~, as relates to ~「~に関しては」についても記述が見られ、まずこれらの表現は1800年代に文献に載ったこと、それからこれらもやはりas far as it concerns ~「~に関する限り」やin the case in which it concerns ~「~の場合は」に相当することがわかります。

ここで思い浮かんだ表現が(as) compared with[to] ~「~と比べると」です。おそらくこのasもas far asのasであり、compared with ~「~と比べると」につけることにより、読み手は一瞬に

して、「あっ、あの決まり文句のcompared with ~だ」と瞬時に判断できるのではないのでしょうか。

compared with ~ 「~と比べると」

as compared with ~ 「~と比べた場合」

<as far as it is compared with ~に相当>

最後にasをさかのぼってみましょう。asのもともとの意味は、all + so「まったくそのとおりのとおり」です。昔のsoはswaと綴られましたから、all + soはalswaとなります。これが時代を経て、現在のasになるのですが、興味深いことに途中でalsoを経て、asに至っています。

↓ alswa

↓ alswō

↓ also ⇒ 「~もまた、同様に」のalso

↓ alse

↓ ase

as

Q: 「ええと」とか「それじゃあ」を意味するwellがありますが、「うまく、上手に」を意味するwellと関係あるのでしょうか？

A: 「ええと」とか「それじゃあ」を意味する間投詞のwellは「うまく(副詞)あるいは「結構な(形容詞)」を意味するwellから派生したものです。一例に「それじゃあ」を意味するwellがどのように派生したのかを見てみましょう。次の対話文のwellにご注目ください(⇒は意味が変化していったことを表しています。また、' 'に挟まれた部分は*OED*からの引用であることを示します)。

A: Mr. Jones, what shall I do next?

「ジョーンズ先生、次に何をしましょうか」

B: Well, you may take some rest.

「(よろしい⇒)それじゃあ少し休んでもいいよ」

このWellは、もともとは(You've done very)well. 「よく頑張ったわね」という意味で、その場の状況をいったん認めるような働きをしていました('the speaker or writer accepts a situation')。

しかし、You've done very well.ではなく、Well,...のように単独で使われている('employed without construction')うちに、もともとの意味合いが薄れ、その場の状況に合わせ、「それじゃあ」、「ええと」、「まあ」などの意味に解釈されるように

なっていました。

A: Have you decided which course to take?  
「どちらの講座を取るか決めた？」

B: Well, I haven't decided yet.  
「(よく覚えていてくれたね。でも⇒)ええと、  
まだなんだ」

このように問投詞の well「まあ、ええと、ところで、それじゃあ」などは、相手の発話やその場の状況をいったん認める well「よろしい、よく頑張ったね」に由来し、やがて話を始める前置き('a preliminary word')や話の再開を示す語('a resumptive word')として用いられるようになりました。

Q: someone とか something に形容詞を使うとき、これらの語の後ろに置かなければならないのはなぜでしょうか。

I saw something white flying in the sky.  
「何か白いものが空を飛んでいるのを見た」

A: これは something という単語の表記の歴史をさかのぼると氷解します。というのは、現在の something はその昔, some thing というように二語に分けて表記されていたからです。従いまして、現在の something white は当時、次のように普通の語順で表記されていました。

some white thing  
「何か白いもの」

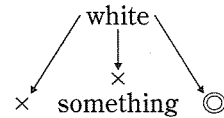
『大英和辞典』(研究社、第5版)の thing の例の中にも、some warm things「何か温かいもの」という表現が載っています。

しかし、some と thing は日常でとても頻繁に使う語同士だったのでしょうか、1300年代に入りますと次のように some と thing をハイフンでつなぐ語形が登場し、やがて一つの単語として表記されるようになったのです。

↓ some thing  
↓ some-thing  
something

もうおわかりいただけたと思います。some thing が something になったため、形容詞の white はそれまでのように some と white の間に割って入ることができなくなったのです。かといって、some の前に入ることはできません。some は

white のような普通の形容詞の前に置かれる形容詞だからです。結局 white は some と thing がくっついてしまった後、便宜的に something の後ろに置いてもらうほかない、ということになります。



ついでながら、他の同じような単語がいつ頃一つの単語として表記されるようになったかを見ておきましょう。

nothing <1000年代>  
anything <1400年代>  
someone <1800年代>

これらの単語の場合も、一般的な形容詞は no- や any- の前に出るわけにもいかず、中に割り込むわけにもいかず、後ろに置いてもらうことになります。

Q: 「健康な、健全な、(眠り)が深い」などを表す sound と「音、～のように聞こえる」などを表す sound はどのような関係にあるのでしょうか。

A sound mind in a sound body. 《諺》  
「健全な身体に健全な精神」

This may sound like a paradox.

「こう言うと矛盾しているように聞こえるかもしれない」

A: この二語は、もともと綴りも意味も全く異なる語同士だったのですが、何百年もかかって最終的に綴りが一致したのです。では、この二語の数奇な運命をさかのぼってみましょう。まずは、「健康な、健全な」の sound の方からです。

この語は、現在でも広くゲルマン諸語に見られる語です。現代デンマーク語と現代スウェーデン語で、ge- が消失していることがおわかりいただけだと思います。

「健康な」

現代ドイツ語	gesund
現代オランダ語	gezond
現代デンマーク語	sund
現代スウェーデン語	sund

実は、昔の英語の場合も gesund だったのですが、同様に ge- の部分が消失し、いったん sund となりました。その後、主な綴りだけでも sunde, sound (e), sownd などがありましたが、最終的には sound という綴りに落ち着きました。

また、もともとは「体が健康」という意味に使っていたのですが、1500年代から a sound mind 「健全な精神」のように、心の健康にも使われるようになりました。

では、次に「音、～のように聞こえる」の sound に移りましょう。この語を OED で調べますと、'AF' とあります。'AF' とは、ご存じの方も多いと思いますが、Anglo-French のことで、ノルマン人征服の後、英国に移ったノルマン人が使っていたフランス語のことを指します。彼らの「音」を意味する soun がまず英語に定着します。この soun は、soune, sown, sownn などと使われていくうちに、1400年代に -d が添加され、現在私たちが親しんでいる「音」を意味する sound になりました。

少し脱線しますが、-d の添加で思い出されるのは、be bound for ～ 「～行き」の bound です。この bound の -d も boun に添加されたものです。この boun は「準備ができて、～行き」という意味の語でした。1500年代に入って、この boun に -d が添加されたのです。

この添加について、OED は「縛る」を意味する bind の過去分詞 bound と混同されたのではないかと推測しています。つまり、これは私見になりますが、「～行き」とは「行き先が縛られていて他の場所に行けない → 縛られて (bound) → ～行き」というような連想から、本当は boun を使うべきところに bind の過去分詞 bound を使った、というような混同が起こったのかもしれませんが。

さて、話をノルマン人が使っていた soun に戻したいと思います。ノルマン人とは north (北の) men (人) ですから、スカンジナビア地方からやってきた人たち(もともとはヴァイキング)のことで、この人たちが身につけたフランス語は、パリ周辺で話されていた標準フランス語に対し方言の関係にありました。従いまして、ノルマン人が使っていた soun 「音」に対応する標準フランス語の「音」は son でした。

このラテン語の sonus 「音」に由来する son に関わる語も英語にいくつか借用されているので、ま

めてみました。

sonar 「ソナー、水中音波探知機」

sonata 「ソナタ、奏鳴曲」

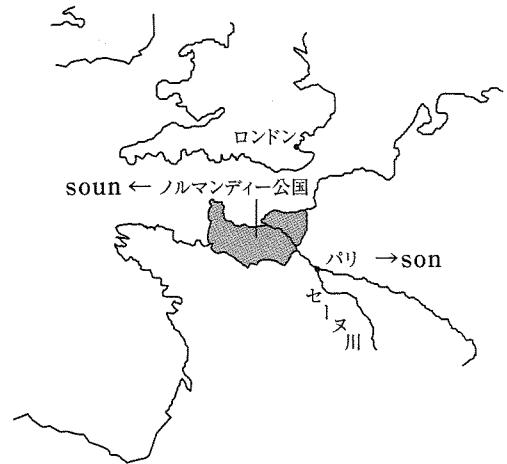
sonic 「音波の、音速の」

supersonic 「超音速の」

consonant 「con (一緒に) + sonant (鳴らされた → 共鳴の、子音)」

sonnet 「14行詩(-et は指小辞)」

このようにして英語では「音」に関して、ノルマン人に由来する sound の系列と標準フランス語に由来する son の二つの系列が存在しています。



※『英語のしくみが見える英文法』(文芸社)のp.164より。

ある社名で **Sony** と言えば、もう「音響関連の会社」とすぐにもご想像いただけるのではないのでしょうか(英語のこのような背景に興味をお持ちになった方は、今春6度目の増刷となりました拙書『英語のしくみが見える英文法』(文芸社)を図書館に入れていただければ身に余る光栄です)。

(新潟県立三条高等学校教諭)